

津井の池の蛇婿・隠岐郡隠岐の島町久

令和3年2月16日掲載

収録・解説・酒井

董美たによし

イラスト・福本 隆男



https://kanbenosato.com/minwa/a/kancho_201708.html



語り手 中沼アサノエさん
(明治39年生まれ)
収録・昭和56年6月6日

あらすじ

昔々、長い間、日照りが続いたので村中困りはて、庄屋さんは、津井の池の水神さんに願かけしたら、庄屋さんの夢枕に若衆が現れ「雨を降らせるので、今から十日の間に年頃の娘をわしの嫁にさし出すように」言われ、承知した。

翌日、大雨となった。庄屋は人身御供の娘を捜すが、どの娘も承知しない。庄屋さんの十七になる一人娘の加代が「わたしは人身御供になりさえすれば、村のみなさんも助かります」というので、池へ行つて、「雄池雌池の黒ん坊よう、うちの加代が嫁になるて言うけん、今夜迎えにござい」と言うとうちの渦巻きが起こり、夢枕に立った男衆がにっこり合点した。

やがて十二時近く、男衆が加代を迎えに来た。「ただ一つ守っていたきたいことは、一カ月間は、加代さんと呼んではくたさいますな。一カ月が済めば、池へ来て呼んでください」と加代を連れて

行きかけた。庄屋さんはあわてて、「待つてください。ただ一つ頼みがあります。『鏡は女の魂』と申し、寂しいときなど。鏡を見るときが落ちつき、迷いが収まります。これだけは持たせてください」と小さい鏡を渡した。若衆は承知し、加代の手を取り、「必ず後ろは見るなよ」と別れて行きました。

やつと一カ月が来、池へ行き、「雄池雌池の黒ん坊よう、加代に会わせていざいざい」と呼ぶと、池に渦巻きが起こり、まん中から加代が体を半分出して手を振り、合点して見せました。

やがてあたりが暗くなつたころ、加代がもどつてきました。

楽しく話すうち夜がふけたので、「今夜は親子一緒に枕を並べて寝よう」と言うとうちの加代が悲しそうに、「わたしはもうこの家のものではありませぬ。一人別に休ませてください。決してわたしの部屋へはのぞき見などしないでください」と一人一部屋へ入りました。

しばらくすると加代の部屋から大いびきが聞こえるので、「いびきなんか聞いたこと

はなかつたのに」と、そつと襖をあけてのぞいたげな。美しかった娘は大きな蛇となり、七巻き半のトグロを巻き、上に首を乗せて寝ている。

それを見た両親、仰天してしまい、夜の明けるのを待つていた。

いつまで待つても加代が起きて来ないので、部屋を明けて見たら、加代の姿はなく、ただ一つ手鏡だけが部屋に残っていました。

それからというものは、池のはた行つて「加代よう、黒ん坊よう」と呼んでも、男衆も加代もついに姿を見ることができませんでしたと。

解説

昔話が伝説化したものと考えられる。この話は、中沼さんが五、六歳ごろ、寝物語に伯母の佐藤イワさんから聞かされたものという。

ここに紹介した話は、その佐藤さんが語られた雰囲気そのまま壊さないように、中沼さんが再話してくださったものである。せひスマホなどでHPから、実際の語りをお聴きいただきたい。

(元島根大学法文学部教授)